

# CT Guided Needle Biopsy of Peripheral Lesions—Lesion Characteristics That May Increase the Diagnostic Yield and Reduce the Complication Rate

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2021-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田島, 学 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2002597">https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2002597</a>

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2328 号

Recommended lung parenchymal targets for diagnostic approach by computed tomography-guided transthoracic lung tumor biopsy

経胸腔的 CT ガイド下肺腫瘍生検による診断が推奨される肺実質画像の解析

田島 学 (たじま まなぶ)

博士 (医学)

#### 論文内容の要旨

経胸腔的 CT ガイド下肺生検は肺癌の診断に有用であるが、他の診断的検査と比較して合併症率の出現率が高い。我々は、肺内病変における経胸腔的 CT ガイド下肺生検が迅速な病理診断に役立つ症例を明らかにし、その合併症の危険性と検査による恩恵を検討することを目的とした。肺内病変に対して経胸腔的 CT ガイド下肺生検を施行した 110 症例と気管支鏡検査による経気管支生検を施行した 691 例を後方視的に登録・検討した。経胸腔的 CT ガイド下肺生検による診断率は 87.3%、気管支鏡検査による経気管支生検の診断率は 76.3%であった。他の診断的検査で診断に失敗した後に経胸腔的 CT ガイド下肺生検を施行した症例では 92.3%で診断が得られた一方で、経気管支生検による診断率は 66.7%であった。

CT 画像において、病変内部に気管支が走行していない (気管支サイン陰性) の症例では、経胸腔的 CT ガイド下肺生検が経気管支生検に比べて統計学的有意差をもって診断率が高かった ( $p < 0.001$  : 89.4% vs 0%)。合併症の出現率は経胸腔的 CT ガイド下肺生検が 50.9%で、経気管支生検が 21.1%であった。しかし、CT 画像で壊死パターンを呈している病変、胸膜直下の病変、標的病変内の穿刺距離が 15mm 以上の症例については、統計学的有意差をもって合併症の出現率が低かった。経胸腔的 CT ガイド下肺生検は診断率の高い有効な検査であり、合併症のリスク因子を考慮すれば安全に施行でき、気管支サインが陰性の場合には特に推奨されると結論づけた。